(28)

氏名(生年月日)	松村 章子（マツムラ アヤコ）
本　　籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第562号
学位授与の日付	昭和57年4月16日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**子宮剔出術及び附属器剔出術後における内分泌動態と成熟指数に関する研究**
論文審査委員	（主査）教授　大内　広子 （副査）教授　今井　三喜，教授　石津　澄子

論文内容の要旨

研究目的

成熟年齢の婦人が子宮及び附属器剔出術をうけると，術後内分泌の変動が起こり，卵巣欠落症状及び更年期障害様症状が現われる．この診断，治療にはホルモン測定が必要であるが実際面では隘路があり，度々の実施はむつかしいことが多い．著者は卵巣機能，特にエストロゲン作用の指標に，日常診療において簡便に施行できる腟細胞診の成熟指数を用いて，術前術後の内分泌動態，及び卵巣欠落症状との関連，更に治療による変動について研究した．

研究対象

東京女子医大第二病院にて，器質的疾患のために手術した76例で，術式は，子宮単純全剔＋両側附属器剔出術（ATH＋BSO）24例，子宮単純全剔＋片側附属器剔出術（ATH＋USO）20例，子宮単純全剔術（ATH＋BS）32例である．

対照群は手術を行なわない患者20例について検査した．

研究方法

腟細胞診は，成熟指数（MI）により，内分泌系は，血中卵胞刺激ホルモン（FSH），黄体化ホルモン（LH），エストラジオール（E_2）の測定をおこなった．卵巣欠落症状はKupperman更年期指数（K指数）により，術前から術後1年まで追跡し，各々の相関関係を求めた．K指数15点以上を，卵巣欠落症状の出現とし，治療を行ない，漢方薬単独投与，又は結合型エストロゲン剤併用投与し，MI，ホルモン測定をおこない検討した．

研究成績

1）血中E_2とMIは，黄体期では相関なく卵胞期で，正の相関を示す．

2）術後卵巣欠落症状の発現率は，平均43.4%で，ATH＋BSO＞ATH＋USO＞ATH＋BSの順に高かった．症状初発の時期は，平均1.7±1.3カ月で，ATH＋BS＞ATH＋USO＞ATH＋BSOの順に早かった．各術式共に，血管運動神経障害様症状が，最も頻度が高かった．

3）術後の血中ホルモンの変動は，ATH＋BSO後では，卵巣欠落症状の有無に関係なく，血中FSH, LHの上昇と，血中E_2の低下がみられた．ATH＋USO後では有症状例で，血中FSH, LHの上昇とE_2の低下を，無症状例では，血中ホルモンの変化は，殆どみられなかった．ATH＋BS後では，卵巣欠落症状の有無に関係なく，血中ホルモン値は変化しなかった．

4）術後の卵巣欠落症状の治療において，漢方薬単独投与群では，血中ホルモン値には変化がみられなかったが，結合型エストロゲン剤併用群と同じような，K指数の減少と，MIの右方移動が観察された．

5）対照群，術前，術後及び治療後のMIは血中ゴナドトロピンとは相関なく，卵胞期において，血中E_2（10 pg/ml以上の値の場合）と正の相関を示した．

6）術後のK指数は，常にMIと負の相関を示した．

結論

術後の卵巣欠落症状，及びその治療効果について，内分泌変動と腟細胞診の関連性を検討し，MIは，血中E_2の変動及びK指数の変化の指標に用いうることが明らかになった．

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は成熟婦人の子宮および附属器摘出術後内分泌の変動により卵巣欠落症状が出現し，その診断，治療の指標にホルモン測定を必要とするが，簡便におこなえる腟細胞診の成熟指数の検査によって血中の E_2 の変動，Kupperman 指数の変化を知ることができる臨床的に役だつ学術上価値のあるものと認める．

主論文公表誌

子宮剔出術および附属器剔出術後における内分泌動態と成熟指数に関する研究

東京女子医科大学雑誌　第52巻　第1号

107～126頁（昭和57年1月25日発行）

副論文公表誌

1）診断が困難であった産褥期急性虫垂炎の1例．

東女医大誌　**46**（10・11）868～870（昭51）

2）多胎妊娠の脈波．

日産婦東京会報　**29**（4）274～277（昭55.12.）

3）18トリソミー症候群の1例．

東女医大誌　**51**（5）520～524（昭56）

4）臍帯血分析の臨床的評価．

東女医大誌　**51**（11）1707～1711（昭56）

5）糖尿病合併妊娠．

周産期医　**11**（12）1763～1766（昭56.11.）

6）喘息合併妊娠．

周産期医　**11**（12）1776～1778（昭56.11.）

7）切迫流産の予後判定についての検討．

東女医大誌　**52**（1）14～20（昭57）